

今治造船、建造累計2000隻

■西条で式典、川汽向け200隻のダブル記念

今治造船は18日、西条工場で川崎汽船/Kumiai Navigation Pte向け18万重量トン型バルカー“Cape Lily”(S8106番船、写真)の命名式を行った。同船は、今治造船グループの建造船(鋼船)として、通算2000隻目。奇しくも、56年前の鋼船第1船と同じく、用船者は川崎汽船。そして川崎汽船向け新造船としては200隻目という、2つの記念船となった。

五月晴れの空の下、西条工場の東岸壁で開催された命名式には、用船者の川崎汽船のほか、船主、金融機関、船舶管理会社、保険会社などから関係者が多数集まった。式典では川崎汽船の朝倉次郎社長が新造船を命名し、くみあい船舶の米田千賀子専務が志綱切断した。

1901年創業の今治造船グループは、1956年に鋼船1番船となる愛媛海運/川崎汽船向け“富士丸”を竣工。これ以来、56年間にわたって建造実績を積み重ねて、“Cape Lily”が累計2000隻目となった。通算1000隻は1997年に達成していたが、グループとして建造量を拡大したことで、その後わずか15年間でさらに1000隻を積み重ねた。

祝賀会では今治造船の檜垣幸人社長があいさつし、今治造船にとって鋼船1番船や丸亀事業所の1番船、幸陽船渠グループ入り1番船、西条工場の1番船、初のVLCCやLNG船など、節目となる船がいずれも川崎汽船向けであったことを紹介



し、「ぜひ300隻も早く達成できるよう頑張りたい」と話し、「鋼船2000隻を迎えたいま、環境は厳しいが、難局を乗り越えるためグループとして誠心誠意取り組む」とあいさつした。

船主のKumiai Navigationの黒柳智丸マネージング・ダイレクターは「くみあい船舶グループにとっては、40年前の創業時の初の新造船“ほうらい丸”が、今治造船建造・川崎汽船用船だった。この組み合わせでの船をぜひ増やしていきたい」とあいさつした。

その“ほうらい丸”の運航担当を若き日に手掛けていたのが、川汽の朝倉社長。朝倉社長は「今治造船がこれからも3000隻、4000隻と世界の海運に船を送り出すと期待している」と祝辞を述べた後、今治造船と川汽の200隻の関係について紹介し、川汽にとっても、約40年前の初の287万立方フィート型チップ船シリーズや4700台積み自動車運搬船シリーズ、石炭船コロナシリーズなど、節目となる船がいずれも今治造船建造だったとし、さらなる関係強化を約束した。

2000隻と200隻というダブル記念。祝賀会に先立つ船内での乾杯では、川汽の有坂俊一執行役員が「プロ野球の世界では2000本安打と



檜垣社長(左)と朝倉社長(右)



船主や金融など関係者が集まった



例えば殿堂入り。200勝投手も殿堂入り。まさに殿堂入りの船だ」とあいさつして会場を沸かせた。

【Cape Lily主要目】9万2752総トン、18万1303重量トン、全長291.98m、LBD=283.8m×45.0m×24.7m、航海速力約14.95ノット、主機関：三井MAN B&W 6S70MC-CMk7型ディーゼルエンジン×1基(連続最大出力1万8660kW)、船級NK。